TANAKA HIROFUMI
PRESENTS

RAKUGO THE FUTURE

JAPANESE TRADITIONAL ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第22回:恐怖のインターネット

このエッセイはインターネットでしか読めないので、今、これを読んでいるあなたはインターネットをしている人であるということになる(あたりまえだ)。だから、インターネットって何？　世界中の情報が画面で読める？

ああ、それやったらうちにもあるで。テレビのことやろ、というようなことはないはずだ。中には、自分のホームページを作っている人もいるだろう。というわけで、今回はインターネットの話をしよう。

実は、昔、インターネットを扱ったファンタジー小説を書いたことがあるのだが、それを執筆中は、インターネットなんかしたこともなかった。想像で書いたのである。というか、適当に書いたのである。というか、でたらめを書いたのである。書き終えるまでに、一度ぐらいインターネットカフェにでも行こうかと思ったのだが、結局行かなかった。めんどくさかったのである。当時の私のパソコン通信に関する知識といえば、

「モデム？　ああ、変身して地を駆けるやつ」

「ログ？　『オヤジノウミ』のこと？　ああ、あれはグロか」

というぐらいだったのである。それが、いまや、こうしてインターネットにエッセイとも何ともつかぬ文章を書いていたりするのである。たいした出世である。しかも、今ではホームページまで持っていたりする。

私は、自分のホームページは、全部、ＨＴＭＬで書いている。最近は、それが癖になって、小説もＨＴＭＬで書かないと気が済まなくなってきた。郵便物の宛名も、市役所での届け出も、何もかもＨＴＭＬで書く。ここ数日は、人と話している時も、独り言を言ってる時も、

「＜ｈｅａｄ＞ビールもう一本飲もうかな。＜／ｈｅａｄ＞」

などとＨＴＭＬでしゃべっているほどだ。

ＨＴＭＬで文章を書いていて、よくやる失敗が、タグでその文章を挟まなければならないのに、頭のタグだけつけて、尻のタグを忘れてしまうことだ。そうすると、そこからあとの文章は全て頭のタグの影響を受けたままということになってしまう。こういう状態を「尻タグないの」という。

今、笑いましたか？　今回、ここで笑わないともうこのあと笑うところないですよ。

インターネットにホームページを開き、自分のことをいろいろとアピールして、ネットの世界で有名になる、いわゆる「ネット・アイドル」という人種がいる。たいていは「もひとつ」だと思うが、中には、木村たぐや（略してキムタグ）、吉田タグロウ、辰巳タグロウなどのように、タグいまれな才能を持っている人々もいる。とくにキムタグは、ネット俳優として、タグまじい男性の役からタグや姫のように美しい女性の役までこなす器用さもあり、これからの活躍が期待される。彼のホームページのＵＲＬはあえて書かないが、リンクからリンクへとタグっていけば見つかるはずだ。タグというネタだけでこれだけひっぱるとは、うーん、自分でも想像もつかなかった。

インターネットといえば、つきものなのは怪談だ。小説や映画でも、インターネットの暗部を扱ったさまざまなホラーやサスペンスが発表されたが、中でもいちばん猫を振り回すのが、牧野修著の「リアルヘヴンへようこそ」（廣済堂文庫）であろう。ネットの世界は、目には見えなくても実は世界中に広がっている。広大無辺であり、全体がわからないだけ不気味さもある。そんな電脳世界の深淵にぽっかりとひらいた暗い口を描いた優れた作品は他にも多いだろうが、「リアルヘヴンに

RAKUGO THE FUTURE

第22回:恐怖のインターネット

文:田中啓文

ようこそ」が最も猫を振り回していると考えられる。もしかしたら不勉強で、他にもよりいっそう猫を振り回す作品があるのかもしれないが、今のところ、「リアルヘヴン……」が猫を振り回すことに関しては最右翼と思われる。読者諸氏の中に、他にもっと早く猫を振り回すとかもっと何匹も猫を振り回すとか猫を振り回して敵を倒すといった作品をご存じのかたはご一報されたし。ただし、虎を振り回すとか、蛙を振り回すとかいった作品に関しては除外する。ましてや、センザンコウとかアルマジロ、フクロオオカミ、ヤマネ、カブトガニ、クトゥルー、ナイアーラトテップ、べとべとさん、オシラサマなどを振り回す話は論外なので注意。

私が、インターネットを扱ったホラーで一番怖いと感じたのは、実は「リアルヘヴン……」ではない。明治時代に実在したサダキチという丁稚が作ったホームページがあり、そこにアクセスするだけなら問題ないのだが、リンクを張ると恐ろしい呪いがかかる……という作品「リンク」である。もちろん、大ヒットしてベストセラーになったので、皆さんも知っているだろう。ただ、私は、続編の銀河鉄道もの「メーテル・リンク」はあまり好きではない。続々編で、閉ざされた町が舞台の「リンクうタウン」や、続々々編で、清涼飲料水を飲むと呪いが伝播する「チオビタド・リンク」にいたっては……あ、いやいや、あまりうかつなことを書いてはならぬ。鶴亀鶴亀緑亀。

えーと、何の話だったっけ。そうそう、インターネット怪談である。私は残念ながらというか幸いにもというか、ネットをしていて怖い目にはまったくあったことがない。夜中に時々、パソコンの奥から、「おいでよ……こっちにおいでよ……」という声が聞こえてきたり、画面に突然「おまえはあと２カ月で死ぬ」とか「血が……血が足りない……血をください……」というメッセージが表示されたり、チャットをしていると、手が勝手に動いて、「殺してやる。おまえを殺してやる。ずたずたに切り刻んでやる。ノスフェラトゥの息子より」と書き込んでしまったり、ネットサーフィン中にふっと記憶がとぎれ、気がついたら、底にべっとりと血と髪の毛のついた大きな花瓶をつかんでおり、隣に見知らぬ女が後頭部から血を流して倒れていたりする……そんな程度である。

しかし、もっともっと怖いことがあるらしく、Qという編集者に聞いた話だが、彼の知り合いのとある有名作家（年齢七十一歳。特に名を秘す）が、流行に遅れてはならじと生まれてはじめてパソコンを購入し、インターネットをしてみようといろいろ苦労したが、どうしてもうまくつながらない。しかたなく、Qに、どうしたらホームページなるものを見ることができるのか、とこっそりきいてきた。昔から、自分は何でも知っているという態度を取っている人なので、「知らないから教えてくれ」とおおっぴらに言いにくかったらしい。

ちなみに、その有名作家は、業界では男色家としても有名であり、彼の毒牙にかかった若手編集者や若手作家は数知れずという。

「プロバイダーに接続はできるんですか」

「風呂入った？　いや、まだだ。君と一緒に入ろうか」

「いや、サーバーにね……」

「サーファー？　時々湘南で見かける連中だな。いいマスクのやつもたまにおるが……」

「あの……ブラウザは何をお使いですか」

「ど、どうしてわしがブラウスを着用していることを君は知っとるんだ。隅におけんな」

「ブラウスじゃなくて、ブラウザ。そ

RAKUGO THE FUTURE

第22回:恐怖のインターネット

文:田中啓文

れが必要なんですよ」
「ほほう……」
「ＩＥよりも、ネスケがいいですよ。ネスケを手に入れてください」
「ネスケか。うむ、そう言えば名前は聞いたことがある。どうしてもそれを入手せねばならんのかね」
「そうですね。がんばってみてください」
「あいわかった。何とかしよう」
　そして、ひと月後、その作家の自宅に呼ばれたQは応接室で驚愕した。
「どうだ、やっと手に入れたぞ！」
　その作家がぎゅっと手を握りしめているのは、一人の角張った顔の人物だったという。
「なかなか首を縦に振ってくれんかったが、ようやくこうして一緒に暮らすことができたわい。うはははは。これでホームページが見られるのう」
　その作家は、そう言うと、角張った顔の中年と濃厚なキスをした。
「あのね、先生……私が言ったのは、ヨネスケじゃなくて、ネスケ！」
　というようなことがあってから、Qはなるべくその作家には近づかないようにしていたらしいが、二カ月ほどしてから電話があり、
「Q君、やっと本物のネスケを入手したぞ。もちろん、ヨネスケなどではない、ちゃんとしたネスケだ」
「それはよかったですね」
「君にいの一番に報告しようと思ってな。これでわしもネット・アイドルじゃ」
「それでは先生、これからは原稿もＥメールでちょうだいできますね」
「は？」
「いえ、その……Ｅメールをいただけますか」
「ど、どうしてそのことを君は知っとるんだ。隅におけんな」
「そのことって……Ｅメールをくださればいいんです」
「も、もちろんじゃ。何しろわしはネット・アイドルだからな。わかった、手放したくはないが、君の頼みとあってはしかたがない。さっそく送るよう手配いたそう」
「手放す……？　あの……」
　がちゃんとあわただしく電話は切れた。そして、数日後。Qの家のチャイムが鳴り、出てみると、そこに立っていたのは、喜色満面のその作家と、胸の谷間が思い切り強調されたハイレグのレオタードを着た若い女性だった。硬そうな金髪のロングヘアで、かなりの美人だが顔の造作は無骨だ。大きな唇に真っ赤なこてこてのリップを盛り上げるように塗っている。作家は、その女性と露骨にいちゃついたあと、彼女をQに押して寄越した。
「見てのとおりの美形だ。君にあげるのは惜しい。断腸の思いではあるが、インターネットを極めるためには仕方ない。どうぞ持っていってくれたまえ。幸せにしてやってくれよ」
「ちょちょちょっと待ってください。私は何のことだか……」
　その時、彼の頭にひらめいたのは、その作家が男色家で、女性は全く相手にしないということだった。つまり、この女性は……。
　彼は怒鳴った。
「あのね、先生……私が言ったのは、シーメールじゃなくて、イーメール！」
　怖い怖いインターネットは怖い。
　というわけで、今回は終わります。
　何？　落語もＳＦも出てこなかった？
……
……
　そういやそうですねえ。
……
……
　あかんのかい。